

トマスにおける神の働きの対象としての個物

— 神の内に留まる働きにおける —

谷 口 茂

序

トマスは『神学大全』第1部第14問題の序文の中で、それ迄に論じられた神の実体乃至本質に関する事柄を基礎に置き、続いて神の働きに関する事柄の考察を展開している。そこでトマスは、働きに二様の区別がある事を示す。

一方は「働く者の内に留まる働き」であり、他方は「働く者の外なる果に迄及ぶ働き」である¹⁾。

この二様の働きの区別は、神において先ず認められ、『神学大全』の構成に従えば、前者の働きに「神の知・意志」といった事柄が属し、続いてそれ等を基として考察される「アイデア・摂理・予定」の問題が、連関する。

他方後者の働きには、神御自身以外の被造物を創造する働きが属し、『神学大全』の構成では上の問題に続いて、創造の働きを基礎付ける「神の能力」についてが、論じられる。

ここで前者の働きは、後者の働きの根原として考察される。即ち神が、自己から自己以外の他者となる対象へと働きを及ぼす、その為の根原が、神の内に留まる働きについての考察において論じられていると言えよう。

ただしトマスは、神の内に留まる固有な働きを神の自己認識であるとし、従ってその固有な対象を神御自身であるとしている。「神の知」を扱う第14問題の1項から4項に渡って、トマスはその事を明らかにしている。

しかし続く5項において、「神は自己以外のものを認識するか」との問題を立て、この中で神は自己の本質認識の内に、それと同時に他者の認識を含んでいるとしている。上述した創造の働きの対象の根原とは、正にこの意味での他者認識において、対

象とされているものの一部に他ならない²⁾。

以上の様に、神の内に留まる働きにおける自己以外の対象を理解する事は、トマスが後に展開する創造論・救済論において扱われる対象を、その根原から理解する事となる。

ところでこの自己以外の対象とは、創造・救済に与る被造物なのであり、更にその被造物は固有な意味で自存するもの (subsistentia) である。自存するものとは、固有な存在を与えられてそれを有するものであり、これは個物として存在するものである³⁾。従って神の内に留まる働きに属する事柄の考察の中にも、自己以外の対象としての個物が論じられる訳である。

本稿では、神の内に留まる働きの対象としての個物を、神は如何に認識しているのか、又その内容は如何なるものか、といった観点からトマスに従って考察してみたい。

1. 神の個物認識の仕方

思想史の上で個物が重要な問題とされたのは、キリスト教思想の中で個の摂理・創造・救済が問われる様になってからである、とされる⁴⁾。それ以前のギリシア哲学の内では、むしろ様々な個物の内にある共通性・普遍性が、個々のもの側から探られた。

これに対してキリスト教思想に至って、今度は普遍の側から個物そのものへの問題が導かれた。トマスの体系の中にあっても、そうしたキリスト教思想のモチーフは明らかである。実際トマスは、ここで扱う「神の知・意志・イデア・摂理・予定」といった問題の中でも、個物に関する事柄を論じている。

ではこれ等の問題の中で、トマスは個物を如何なるものとして扱っているのであるか。さしあたり先に触れた様に、神の知性認識の内に含まれているものである、と答えられよう。換言すれば、ここにトマスが論じている個物とは、神に観られているところの個物なのである。

ここでトマスが、神の知性認識の固有な対象を御自身の本質である、と結論している事に注意しなければならない。神の内に留まる働きの対象の第一のものは、あくまでも神御自身なのであり、我々が問題とする個物は神にとって第二次的な対象に過ぎない。

この第一次的な対象と第二次的な対象との関係は、前者に後者が内容として含まれ

ているという関係である。トマスは神の自己認識の完全性を徹底する事によって、神の本質に含まれる他者の類似性 (similitudo) やその他一切のものを、神の知の内容に措定している⁵⁾。完全な自己認識の内には、自己の能力、その働きが及ぶもの一切が、知られていなければならないからである。従って神は、第一次的な対象として御自身の本質を、そしてその内容として第二次的な対象を、観ているのである。

トマスのこうした論述は、神の知性認識即ち本質の高貴性と単純性を保証している。同時に又、神が凡ゆる個物を含んだ万有にとっての第一原因である事をも保証している。即ち神御自身からは無限に劣った被造的他者の類似性を知性認識するにしても、それを御自身の本質においてより高貴で完全な仕方で見ると、しかもそれ等は「知性認識されているもの」としてあるのであって、神の知性を形相付け、認識の働きを現実態の状態たらしめる、「それによって知性認識される形象」としてあるのではない⁶⁾。従って神にとっての被造的他者の類似性乃至形象が、神の知性認識の第一次の対象となつて、神の知性を現実態の状態としたり、それ等の複數性を神の知性の側に与えるといった事にはならない、とするのである。同時に又、それ等は凡て予め神の本質の下にあり、そこから他者化される場合、即ちこれに意志が加えられて固有な存在を与えられ、創造される場合、神を第一原因としている事が明らかとなり、神の万有に及ぶ働きが保証される訳である⁷⁾。

以上の様にここで問題とされる個物は、神の知性認識即ち自己認識に、その内容として観られているところの個物である。従って自己を第一原因としてそれ等に働き及ぼす神の観点 (ratio) において、それ等が如何に観られているかが問われているのである。

さてトマスは神の内に留まる働きにおける個物についての論述を、『神学大全』では最初に「神の知」の問題の中で扱っている。既に見た様に、トマスは神の自己認識の完全性を徹底する事によって、神の他者認識を根拠付けている。更にこの認識の完全性は、認識されている内容の完全性をも根拠付け、認識内容としての他者認識の完全性が帰結されている。神の内には他者の諸完全性が先在し、神はそれ等の悉くの固有性 (proprietas) において、それ等を認識している。

こうした固有性の認識は、神にとってのありと凡ゆる他者に迄及ぶのであり、天使の如き非質料的事物の固有性に留まる事なく、一見して神の知性認識には矛盾するかに思われる、質料的事物の固有性をも包含している。質料的事物の固有性の内には、

その個体化の根原としての指定された質料 (*materia signata*) も含まれる。これに対し神の認識は、勝れてその知性の働きによっているものであり、人間の知性認識でさえ個別対象の質料性を捨象し、形象としての形相のみを抽象して認識するのであるから、まして神による質料性を含みもつ個物の認識は矛盾に陥る、とも思われるのである。

しかるにトマスは、万物に及ぶ神の働きの完全性が、やはりここでも質料的個物のその質料性に基づく固有性に迄も及んでいるとする。神の質料的個物への働き、特に創造という働きの見地に立って見た場合、神は一切の前提与件なしに無から創造するのであり、従ってそれ等の質料をも創造するのである。それ故形相に関するも質料に関するも、第一原因としての神に帰属せしめられるとするのである⁸⁾。こうした事からトマスは、一先ず質料的個物の完全な固有性も、神の知性認識において観られていると結論する。

ではこの事が、神の知性認識において上の様な矛盾に、如何にして陥らないとされるのであろうか。トマスによるとそうした矛盾は、人間の認識と神の認識とを短絡的に類比して考察した結果、生じる矛盾である⁹⁾。

トマスの見解において、質料的個物の有する質料性を捨象して普遍的なもの (*universalia*) を認識するのは人間の知性であり、又或る程度その質料性に依じて個性を認識するのは人間の感覚である。これに対し神にはこうした人間の認識能力の如き分割はなく、その分割された二者から生じる上の様な矛盾を有さない。この事は個物認識に関する重要な問題であるから、今一度トマスに従って考察してみよう。

トマスは先ず、我々人間の認識が如何に為されるかを吟味する。今見た様に我々の認識は、感覚認識の働きと知性認識の働きとに、それ等を為す能力の分割に従って、夫々分割されている。一方の感覚認識は対象からの印象 (*impressio*) を受け取り、感覚能力の内に表象像 (*phantasma*) を保有する事によって成立する。感覚認識の働きの現実態は、この表象像という類似性である。他方の知性認識は上の様にして得られた表象像を直接の対象とし、これから可知的形象 (*species intelligibiles*) 乃至形相 (*forma*) を抽象する。知性認識の働きの現実態は、正にこれである。

ところで感覚認識においては、対象そのものの存在が取り入れられるのではなく、その印象が感覚器官を通じて感覚の内に入ってくる。ここで既に対象の有する、そのものの質料性は捨象されている訳である。とは言えこの感覚が保有する表象像には、

対象が感覚に把えられている今・ここ (hic et nunc) における、何らかの質料的条件 (conditiones materiales) が残されている。この事によって感覚が個物を、即ちその質料性において個別性を現わす個としての対象を、認識し得るとされるのである。

これに対して知性認識においては、一旦感覚に保有された対象の表象像を、更なる抽象によって、完全にその有する質料性から切り離してしまう。知性が受け取るのは、質料性とは対極にある可知的形象・形相となる訳である。従って我々人間の知性は、個別的根原の類似 (similitudo principiorum individualum) としての質料性を含んだ類似性を、受け取る事が出来ない。換言すれば、今・ここでの個物を認識出来ないのである。

しかし神の認識においては、以上の如き分割はない。神の認識は人間の認識の様に、対象からの抽象を経て、類似性即ち認識という働きの現実態を受け取るという事はない。純粹現実態たる自らの本質そのものによって、一切を認識する。一切の可知的形象、類似性は自らの本質の内に含まれており、これが神にとって他者となる対象の認識の根原となっているのである。更にこれは認識の根原としてあるのみならず、外の果に迄及ぶ働き即ち創造の根原としても、神の内に保有されているものである¹⁰⁾。従って神の純粹現実態たる本質の内には、質料的個物として創造され得るものの質料性の原因をも含む、そのものにとって固有且つ完全な類似性が、保有されているのである。換言すれば、神は自らの本質に含まれた個物の類似性を知性認識しているのである。

ただしこの場合、次の事に留意しておかななくてはならない。即ち神が保有するのは個物のその固有性における類似性なのであって、質料そのものの類似性なのではない。或る個物が有する質料性を、その個物の類似性に即して見る限りにおいてのみ、神は自らの本質の内にこれを保有するのであり、第一質料の如きものの類似性を保有しているのではないのである¹¹⁾。

以上概括した様にトマスは、神における他者なる対象としての個物認識の仕方を根拠付ける¹²⁾。しかるにそうして認識されている個物は、如何なる内容を示すものであるか。

2. 認識されている個物の内容

トマスの「神の知・イデア」の論述の中には、人間の認識様態及び認識内容と、神

のそれのと類比的な考察が幾つか挙げられている¹³⁾。

先ず我々人間の認識の端緒は、今・ここという時・空間の限定を受けている。同じ限定が又、対象の側にも指定された質料の個別限定を与えている。こうした今・この認識のみでは、対象の内容を当然充分には知り得ない。しかし我々は、継起的 (succesive) に積重ねられてゆく今・この認識内容を保有し、歴史反省的な仕方では対象の同一性を通時的に把捉する。更にそうした認識内容から、対象についての推論的 (discursive) な判断を為す。そしてこれ等の認識内容を表現するのに、我々は命題 (enuntiatio) を用いる。従って我々が保有する認識内容は又、命題的な事柄 (enuntiabilia) ともなる。こうした我々の認識の現実態は、既に見た様に、認識対象の類似性である。

これに対して神の認識は、我々人間の如き時間性を有さない。自ら存在そのものであり、如何なる可能態性も有さない純粹現実態として、永遠なるものである。そしてそれが又、神の本質でもあり、この自己の本質の内に一切のものの類似性が含まれている。従って神は自己の本質を永遠において認識するとともに、一切のものの類似性をも認識する。更に神の認識の現実態は、純粹現実態たる自己の本質でもあるから、自己の外なる他者的対象から扱えられる類似性を要しない。かえって創造においては、自己の内にある類似性に存在を与え、それ等を可能態の状態から現実態の状態へと導くのである。

以上の人間の認識及び認識内容と、神のそれとの比較による考察は、各々の個物認識に関連させられている。殊にトマスの神学上のモチーフから、これ等の考察は人間の個即ち個人についての認識及び認識内容として、論じられていると言ってよい。

我々が或る個人を認識する場合、今・この限定を受けつつ継的にその人を知り、推論的に理解を深め、徐々にその認識内容を拡大してゆくのに対して、神が認識している個人についての認識内容は、その全体が同時的且つ直観的に把握されている。例えば我々にとって未来に起こり得る事柄 (futura contingencia) としての、人の将来への思いや意志をも、神はその個人についての全体的認識内容として、永遠における現在性 (praesentialitas) によって一挙に把握しているのである。しかも神の個物乃至個人の認識は、我々人間の知性が及ばない、今・この質料的個別限定性に迄及んでいる。それを神御自身が原因している程なのだからである。

ところでトマスは、これ迄に見てきた神の本質認識の内に観られている神以外の対

象こそ、アイデアと呼ばれるとしている。アイデアとは「そのもの自身から離れて存在する、他のものの形相」である。そしてこの「そのもの自身から離れて存在する」という、その存在の場をトマスは可知的存在の場とする。更にトマスはこの可知的存在の場が、最勝義に神の知性である事を論証している¹⁴⁾。即ち神の認識内容に含まれている諸事物は、その神の認識においてこそ、そのものの全体的で完全な類似性としてあるからである。ここで又トマスは、アイデアの中でも個物のアイデアが本来のアイデアであるとし¹⁵⁾、その根拠を個物に迄も及んでいる神の摂理に求めている¹⁶⁾。

既に見た様に、神の認識における個物・個人についての認識内容には、それに関係付けられる凡ての事柄全体が、同時に含まれている。実際、或る特定の個に関して眺める場合にも、その有する関連、相関の枠を拡大してゆき、それが置かれた場の最も広い場を窺る視点に立ち得た時始めて、真の完全な全体像が眺められる。そしてその最広義の場は、歴史宇宙全体である。歴史宇宙の内に存在させられる凡ゆる被造的個は、この歴史宇宙全体の中に特定されてこそ、その個としての同一性を認められるのであり、その特定が又、或る一つの個を全体との相関の内に置くのである。

トマスによるこうした考察が、「摂理」についての論述において為されている。トマスによれば摂理には二様の意味がある。一つに「諸事物の目的への秩序付けの理念」であり、又一つに「全体における部分の秩序の理念」である¹⁷⁾。即ち摂理とは、最高善なる神という目的へ全被造物が向ってゆく為の秩序の理念でもあり、その秩序の理念は同時に又、歴史宇宙全体における様々な部分的諸事物が、相互の組織的連関を以って歴史宇宙全体に秩序付けられている、その態勢 (dispositio) の規定を示す理念でもある。従ってこれは神によって予め観られた歴史宇宙全体、即ち創造の端緒から終末に至る迄の全体、そしてその全体の部分としての様々な個についての認識内容であると言えよう。

この歴史宇宙全体と、その全体の部分としての様々な個との関係は又、トマスの「アイデア」についての論述中にも示されている。

トマスは先ず、神の精神におけるアイデアの存在を論証するに当って、被造世界のアイデアが存在す可き事を説く¹⁸⁾。続いて複数のアイデアの存在を論証するに当って、宇宙の秩序のアイデアが存在す可き事を説く¹⁹⁾。こうした被造世界・宇宙の秩序という言葉は全体的世界のアイデアには又、その全体を構成する部分としての諸事物の固有なアイデアが含まれていなければならない²⁰⁾。トマスは個物のアイデアについて論じる中で、正

にそうした関係を明らかにしている。従ってこのイデア論における全体的世界のイデアと、部分的諸事物のイデアは、その関係の上に完全で全体的な個物の在り方を示している。更にこれは神の摂理の内容と符合するものでもある。

結 論

以上からトマスが論じる、神の知性内において観られている個物、即ち神の内に留まる働きにおける個物とは、歴史宇宙全体、その創造の端緒から終末に至る迄の全体において、同時に予め観られている完全なる全体像の事である、と結論付けられるであろう。完全なる全体像には、その内容とされる一切が観られなければならない。それが神の知の内に観られている個物であり、個物のイデアであり、意志を受ける個物であり、更に摂理・予定される個物なのである。

註

- 1) S. T. I, Q. 14, prologus.
- 2) 他に「非有」の認識も含まれている。
- 3) S. T. I, Q. 45, a. 4.
- 4) 山田晶訳編『神学大全』（中央公論社）、409頁、註(1)、参照。
- 5) S. T. I, Q. 14, a. 5, c.
- 6) *Ibid.*, Q. 15, a. 2, c.
- 7) この場合、「是認の知」と言われる。
- 8) S. T. I, Q. 15, a. 3, ad. 4.
De Verit. Q. 3, a. 8, c.
- 9) S. T. I, Q. 14, a. 11, c.
- 10) この場合、「直観の知」と言われる。
- 11) S. T. I, Q. 15, a. 3, ad. 3.
- 12) 尚、天使・人間は、S. T. I, Q. 57, a. 2と Q. 86, a. 1で論じられる。
- 13) S. T. I, Q. 14, a. 7-16.
- 14) *Ibid.*, Q. 15, a. 1, c.
- 15) 拙稿「トマス・アクィナスの神学におけるイデア論の位置付け」『南山神学別冊』（第7号、1989年）、34-43頁、参照。
- 16) S. T. I, Q. 15, a. 3, ad. 4.
- 17) *Ibid.*, Q. 22, a. 1, c.
- 18) *Ibid.*, Q. 15, a. 1, c.

19) *Ibid.*, a. 2, c.

20) *Ibid.*